

天声人語

養蚕業にとって、オスとメスを見分けるのはだいじな仕事である。熟練した職人が白い繭を手にとってながめ、鑑別した時代もあった。やがて、ある道具が取って代わる。はかりである

▼養蚕が盛んだった長野県に「松本市はかり資料館」があり、大正期の雌雄鑑別器が展示されている。メスの繭が10ミigramほど重いのを利用し、天秤てんびんに小さな重りを下げてはかった。誰でも簡単に鑑別が可能になったのは、当時としては画期的だったという▼誰がどこではかっても同じ。それがはかりの命である。1^キogramは水1^リの重さに由来するが、蒸発で軽くなるのが避けられない。金属による国際基準が設けられ、現在はパリにある「国際キログラム原器」という合金がすべての基準だ▼それが約130年ぶりに見直されることが、きのうフランスで開かれた国際度量衡総会で決まった。

金属の実物でなく、物理学の「プランク定数」で表す方法に改められる。どうにもイメージがわからないが、精度を増すのが狙いという▼見直しのきっかけは、原器に10万分の5^ミの誤差が見つかったことだ。汚れや摩耗が原因らしい。見直しが日常生活に影響することはないが、微細な世界で研究が必要なバイオテクノロジーなどには役に立つという▼度量衡の歴史を振り返れば、尺は手の指を広げた長さに由来し、ダイヤで用いられるカラットはイナゴ豆の種の重さがもとだ。身近なもので間に合わせていた時代から、ずいぶんと遠いところまで来た。